

## 事故事例に学ぶ... 7

### 構内での人身事故

#### 構内で後退中に、車両と塀の間に 誘導員を挟み重傷を負わせた

##### 事故の概要

###### 発生状況

日 時:平成11年8月某日 午後10時30分  
天 候:晴れ  
発生場所:千葉県K市内

###### 事故の当事者

A(大型トレーラー):年齢30歳・男性  
B(構内誘導員):年齢61歳・男性

###### 被害状況

B:重傷

#### 事 故 状 況

大型トレーラーを運転していたAは、積荷を配送センター構内に降ろした後、公道に出るため構内係員Bの誘導でバックしていた際に、自車両の最後部とセンター出入口にあったコンクリート塀との間にBを挟み、重傷を負わせた。

##### 事故現場の環境等

現場は配送センターの構内で、出入口には、センターに出入する車両の交通整理や誘導をするため、係員が常時勤務していた。構内の敷地は狭いため、大型車両が頭から進入した場合はUターン等ができず、バックで公道に出なければならない。また、出入口の左右には、公道に沿って長さ約5メートルのコンクリート塀が敷設されていた。構内は照明が整備され明るく、見通しも良かった。

##### 事故の原因

本件の被害者となったBは、構内の出入り車両の交通整理と誘導を業務としており、構内の様子は熟知していた。このことが、かえって慣れからくるBの緩慢な誘導を招き事故を引き起こしており、慎重に誘導を行っていれば起きなかった事故である。一方、運転者Aにも誘導に従ったバックを行っていたとはいえ、後方の安全確認が十分でなかったことが認められる。

#### 職場における交通安全指導

##### 構内事故の防止

構内の事故は道路上の事故と違って、重大事故につながるケースが少ないために軽視されがちです。しかし、構内でも重大な人身事故は発生しており、また、荷主や得意先の構内で事故を起こし、取引停止、莫大な損害賠償請求を起こされたケースもあります。

慣れた構内でも、もう一度特徴等をつかんで安全の確認をしておくことが大切です。

##### 1. 道路 構内進入時のポイント

車道から構内に進入する際は、あらかじめ右折の場合は道路の中央に、左折の場合は左側端に寄って合図を早めに出し、周囲に注意を促します。右折の場合は対向車、左折の場合は二輪車の巻き込みを特に注意しながら、歩道の歩行者、自転車の確認を行い、何時でも止まれる速度で進入することが大切です。



## 2. 構内でのバック時のポイント

バックでプラットフォームにつける際、車両左側の確認はミラーで行うこととなります。

しかし、このミラーでの確認が事故を招くことが多く、少しでも不安があるときは誘導を頼みます。注意しなければならないのは、その誘導員を巻き込む人身事故です。

始めは左後方に立っていた誘導員が、車がホームに近づいたところ突然車両の後部に回ったためミラーから消えてしまい、運転者がそのままバックを続けたために、車両とホームの間に挟んで死亡させたという事例もあります。

こういったケースでは、すぐに一旦停止し、下車のうえ、誘導員の位置と安全を必ず確認してから再度バックすることが大切で、思い込みや決め付けなどは厳禁です。

構内では荷物や車両の移動があり、状況は常に変化しています。決して安全確認の手を抜かず、慎重に運転することを心がけてください。



## 3. 倉庫内へ入る際のポイント

積みおろしのため、構内の倉庫内に入る際には、倉庫のシャッターの高さに注意しましょう。

シャッターが開いていたとしても半開の場合もあり、そのまま入ろうとして車両の上部を接触破損するケースがあります。シャッターは十分に上げてもらい進入してください。また、シャッターに気を取られ過ぎて商品に接触する場合がありますので、状

況に応じて誘導をお願いすることも必要です。



## 4. 出発の際のポイント

荷物の積み込みが終り出発の際には、後方観音開きドアの閉め忘れに注意します。確認を怠ったために、積荷が転落して製品を壊したケース、また、ドアを人に当てて大怪我をさせたケースもあります。ロックしたかどうかの「安全呼称」を習慣化するなど、ポイント・ポイントでの集中を高めてください。

「まず確認。」それから出発しましょう。



## 5. その他のポイント

構内事故の一つとして、コンビニやスーパーの駐車場も要注意です。

コンビニやスーパーは、看板や自動販売機が設置されていることが多く、加えて駐車中の車両や店の日除け等、接触事故を起こす要因が数多くあります。また、常時人の出入りがあり非常に危険な場所であることをよく認識しておいてください。



例えベテランといえども、後ろに目がついているわけではありません。普段から車両の高さ、幅、長さや、固有の特性を正確に知っておくことが大切であり、その上で、自分の五感を使って、確認、判断、慎重な運転が望まれます。